

西安碑林と『西安碑林全集』

氣賀澤 保規*

1 はじめに

このたび念願の『西安碑林全集』が他の機関に先んじて明大図書館に購入され、配架になった。全体が大判の線装本（いわゆる袋とじ本）の体裁をとり、200冊（200巻）を25帙に収めた大部な全集である。中国史にかかわるものや書法家が久しく待ち焦がれていた資料のほとんどすべては、ここに直接目にすることが可能になった。おそらくこれによって、新たな成果が続々と生まれるものと期待される。かく申すわたくしもその列に連なることを考える一人であり、早速東洋史研究室の院生諸君と、内容の調査と把握に取り掛かっている。

ところで、本全集のもととなる「西安碑林」とはどのようなところであり、どのような歴史的背景をもつだろうか。そしてそれに基づく当『全集』がいかなる内容と構成を備え、またいかなる特徴や意義をみることができるのか。このような貴重な史料が収められた機に、その存在を広く知っていただき、より多くの方々に手にとってもらうためにも、ここで全体の概要を押さえておくことは無駄ではないだろう。これを通じて、一度は中国の西安に旅し、本物の碑の林の中に足を踏み入れてみたいと考えていただければ幸いである。

*けがさわ・やすのり／文学部教授／中国史(隋・唐政治・社会・文化史)

2 今日の西安碑林紹介

今日、西安と名を変えたかつての唐の都長安 ―。その古都の地を訪れるものが必ず足を運ぶ場所に、西安碑林がある。正式には西安碑林博物館というここは、城壁に囲まれた旧城内の南門近くの、雑踏を一步はずれた静かな佇まいのなかにある。唐でいえば官衙が棟を連ねた皇城の南辺にあたる。

その朱に塗られた門扉もいかめしい正門を中に入り、そこを右に折れてまっすぐ奥（北）に進むと、やがて瓦屋根の美しい建物群が現われる。正面のあずまや風の建物の額に「碑林」とあり、その真中に大きな四角柱形をした碑が配置される。唐の玄宗皇帝が序や注をつけて親筆した有名な「石台孝経」（745年）である。そしてその奥に凹字形をした第一室の展示室があり、石の壁とも石の塼とも形容できる膨大な石碑が延々と連なる。これが当施設の成立の発端あるいは本体ともなった、唐の開成2年（837）にできた全儒教経典を刻した碑、「開成石経」である。さらに建物は奥につづき、第二室には漢代から唐代におよぶよく知られた大型碑が所狭しと並ぶ。唐への景教（ネストリウス派キリスト教）伝来を記した「大秦景教流行中国碑」（唐・781年）や顔真卿書の「顔氏家廟碑」（唐・780年）等々、歴史や書道に感心をもつものの垂涎の的たる実物がそこにある。

第一室や第二室に蔵された碑群、それはまさに碑が林立するとの表現がぴったりする。碑林の名はそのようなところに由来する。だが碑林の石刻はそれだけで終わらない。奥には第三室から第六室まであり、各室同じく大小の碑を展示する他、展示室の間をつなぐ渡り廊下には、これもまたよく知られた墓誌銘が置かれている。碑が地表に立てられたモニュメントであったのにたいし、墓誌銘とは地中に死者（墓主）とともに埋葬された死者にかんする記録である。これらはとくに歴史にかかわるものにとって、欠かすことのできない一次史料、古文書とほぼ同等の歴史記録となるものであった。

ちなみにいえば、その渡り廊下付近に展示された墓誌は、大半が6世紀の北朝後期のものであるが、じつはそれらは西安一帯の発見品ではない。ここから東に400キロも離れた洛陽近郊に出土し、「鴛鴦七誌斎」の名を

冠された于右任のコレクションの一部である。于右任（1879～1964）は西安の北にある三原県出身、書の方で今日名が通っているが、歴史の面では孫文の片腕として辛亥革命にかかわり、中華民国の重鎮の身で一生を終えた人物であった。その彼が1920年代、軍事や行政の責任者として陝西・河南を管轄していたおり、職務の合間に熱心に収集し、その後数奇な曲折をへてここに収まったのがそれらである。碑林を構成する碑刻一点一点には、このように独自の興味深い物語があることを知っておいてよいだろう。

なお西安碑林の敷地には、上記の碑刻陳列室とは別に、西奥に石刻芸術館という建物ができている。当地の遺跡や墳墓から出土した代表的な文物の展示コーナーである。これらはともに一見に値するが、なかでも先のNHK中国文明展で“東方のヴィーナス”とも銘打って展示されていた「石菩薩像」などはふだんはここに安置されて、訪れるものの心を捉えて離さない。とはいえ、当西安碑林におけるこのコーナーの占める比重は必ずしも高くなく、また90年代始めに、陝西歴史博物館が市内別の場所に開館すると、もともと収蔵されていた美術品や壁画を始めとする歴史文物の大半はそちらに移された。この結果、ここは碑林の博物館、しかも全国の中心に立つそれとしての位置づけがはっきりした。このたび刊行された『西安碑林全集』は、まさにそうした立場を内外に一層鮮明にする意味をもつものとなるのである。（「西安碑林平面図」参照）

3 西安碑林の歴史概略

前述したごとく、西安碑林の直接の発端にして本体となるのが、唐後半の開成2年に刻成された「開成石経」であるが、碑林としての歴史はこれをもって始まるのではない。

前後7年の歳月をかけて完成した開成石経は、全部で114枚の石碑の裏表、計228面からなる膨大なもので、「石台孝経」とともに当時の国子監（国立大学）の敷地に立てられた。その場所は長安城内の務本坊内にあり、今日の碑林博物館の所在地ではない。儒教の確立を目指して刻されたこれ

ら石経も、やがて唐末を迎え長安が荒れ果てた結果、城の区域が旧内城の線まで縮小されると、城外に放置されることになる。そこでそれらを新城内に移転させることになり、旧内城（皇城）の唐「尚書省の西隅」に移し替えられた。10世紀の初めのことである。これを機に他の碑石類も続々とここに運び込まれ、のちの碑林の基が築かれることになるが、しかしこことして今日の碑林と同じ場所ではなかった。

碑林はその後北宋の元祐2年（1087）に、「〔京兆府の〕府学の北（北隣）」の地に移転されたことまでが記録でわかり、ここから移転2度説と3度説とが出されてきた。前者はこの「府学の北」こそが今日の碑林の場所とみなす説である。他方、後者の考え方によると、北宋の府学は元豊3年（1080）に「府城の坤維（西南）」なる場所に移されており、碑林の2度目の移転先はそこになり、ついで北宋の崇寧2年（1103）に「府城の東南隅」たる現在地に移され定着したという。碑林の起点は、両説とも北宋時代というところでは同じながら、前後20年余の誤差を生じることになる。

< 現西安城壁図 >

これにたいし、当『全集』の「総冊巻」に掲載された趙力光氏の「西安碑林歴史述略」はこう集約する。まず唐の尚書省は今の西安市でいうと、市街中心の鐘楼より西側にあったと推定される。これは唐「尚書省の西隅」と「府城の坤維（西南）」とが同一地点であった可能性を意味する。とすると、務本坊から旧尚書省（北宋・府城の坤維）そして「府学の北」へという2度移転説に近づく。ただその後にくる崇寧2年も、府学を碑林に隣接して本格的に移転改修させ、それにあわせて碑林の整備と残された碑刻の搬入が行われた年として、はずすわけにはいかないとみるのである。いわば2度説によりつつ、しかし3度説も無視できないというやや折衷的な考え方である。

ともあれ、碑林が現在地に定置されたのが1087年とみると、歴史は今年(2002年)で915年の長きにわたる。その間、王朝の交代や社会の動乱、大地震や風雨などの天然の原因、さらには人々の無関心による人為的な破壊消滅など、しばしば大きな困難に見舞われながら、一方で歴代王朝の保護や地方人士の助けを受け、施設を整え、碑刻の質を著実に増やしていった。当初ここは「碑院」とか「碑洞」などと呼ばれたようで、「碑林」の名が文献の上に初出するのは明代後期のこと、おそらく以後清代をつうじてこの呼称が流布し、存在それじたいとあわせ社会的認知を受けるに至ったのだろう。

碑刻の増加という点でみると、開成石経や石台孝経など限られた碑刻で出発したものが、その後にくる最初のデータ、13世紀後半の元朝初期において「四一種（開成石経も全体で一種とカウント）」を数えるまでになった。これが17世紀前半の明末までには「六六種」に広がる。そして清に入ると、乾隆16年（1751）段階で「七一種」になり、19世紀末までの清代を通じて増加した分は「二五六種」の多きにのぼったという（前掲趙力光氏）。当時拓本に残されたものから新碑を模刻したり、個人碑を造ることが流行した結果であった。

そして20世紀、最初にこの西安碑林の状況を記録に残した一人に、日本人足立喜六がいる。足立は明治39年（1906）から同43年（1910）にかけて西安で教鞭を執っていたとき、一帯の史跡を調べたなかに西安碑林も加え、後年『長安史蹟の研究』（東洋文庫、1933年）にまとめて報告した

が、それによると当時「碑林に収蔵されて居る石碑はすべて六百六十七方（石）」あったという。

20世紀になってから西安碑林が大きく展開する節目となるのが、1935年（民国24）である。長年の戦乱や混乱のために補修が入らないまま放置されてきた碑林が、著名な考古学者黄文弼を責任者にすえ、中央・地方政府の援助や各界の協力をえて、2年の歳月を費やし大改修がなされ、面貌を一新した。この時大改築された建物群、石碑の配置や展示方法などが、基本的に現在まで踏襲されている。これに平行して当時調査されたところによると、趙力光氏は「四七四種、一四〇〇石」といい、『西安碑林史』をまとめた路遠氏は「四八六種、一二二七石」といい、数値に違いがあるが、いずれにせよこの間に大幅に増加していることがわかる。そしてこれに、于右任が献納した前出「鴛鴦七誌齋」の300点を越える墓誌石が加わるのである。この時期いかに収蔵品が短時日で増えたかわかるだろう。

国内が分断され、1937年からは日本の侵略による日中戦争へと突入する困難な時代状況のなかで、西安碑林は大々的な改修がなされ、碑刻が大量に搬入される。これらは後代の新碑の他に、民間に眠っていた古碑も多く含まれていたはずである。碑林はここに、中華文化の結晶、中華民族の心の拠りどころともいうべき人々の思いが託されたのではなかったか。西安碑林にはそうした民族意識が貫流することも忘れてはならない点である。

4 『西安碑林全集』の構成とその特色

西安碑林は新中国成立後、「陝西省博物館」の名のもとで新たな発展をとげる。ことに収蔵点数の面でみるべきものがあったが、それらは主に三つの方法によってである。一つが各界人士からの寄贈および収集、二つが考古発掘による新出土の碑や墓誌の収容、三つ目が保存状態の悪い省内各地の碑刻を引き取り集中管理するため、である。なかでも第二の碑誌は、解放前にはあまりなかったもので、また従来知られていない内容や事例となるケースが多く、研究材料として関心を集めることになる。かくして今日当館には、およそ次のごとく集約される膨大な数の碑刻が収蔵されるに至ったのである（前掲趙力光氏の集計。1990年代の中頃段階）。

—— 碑石四三五種、墓誌一〇六九種、線刻画七〇種、經幢二九種、画像石一〇五種、造像四四八種、その他石刻二七四種の計二四三〇種、三三〇〇余石。

さて以上の点をふまえて、『全集』200冊（200巻相当）がどのようなになっているかみてみよう。それにあたり全体の構成、収載点数を整理してみたのが次表である。なお断っておくと、碑刻の442点（種）は趙力光氏の示した「碑石四三五種」より多くなるが、この部分ははっきりしない。点（種）数の取り方によって生ずる違いと理解したい。

『西安碑林全集』内容構成一覧表

巻 数	分 類	点（種）数
総巻冊（1巻分）	総論目録	
1～58 巻	碑刻	442 点
59～101 巻	墓誌	762 点
102～104 巻	石刻線画	93 点
105～106 巻	造像題記	67 点
107～198 巻	開成石經（唐刻）	114 石（228 画）
	185～188 巻:清刻孟子 17 石、 清刻大学・中庸 2 石	
189～198 巻	附録 陝西碑石菁華（陝西省内の精品石刻）全 273 点 碑刻 189～194 巻 151 点 墓誌 195～196 巻 81 点 造像題記・石刻線画 197～198 巻 41 点	
補遺巻（1巻分）	（近年碑林新規収蔵品）墓誌類	19 点

この表に関連してまず気づく点は、第189～198巻の10巻分は西安を中心とする行政区域（陝西省）内の機関に保存される代表的碑刻、「陝西碑石菁華」であったことである。『西安碑林全集』と銘打ちながら、すべてが碑林のもので埋められていなかった。その数は273点という多きにのぼ

る。これは一見奇異にも矛盾にも映るが、じつは碑刻研究をする側にとって大変ありがたい意味をもつ。

歴史の古い陝西省内には各地に碑刻が散在し、土地の博物館などに収められている。薬王山（耀県）や臨潼市、昭陵（唐太宗陵）や咸陽市などの博物館の名がすぐあげられるが、他にも多数が知られている。それらの碑刻には過去に機関単位や個別に紹介されたものがあるが、部分的あるいは名前だけに止まったものも少なくなかった。また全文の紹介がなされる場合でも、釈文（録文）だけのものが大半で、全体の様態や文字の正しさを確認する拓本（図版）があまりみられなかった。当『全集』につけられた附録はそうした従来の欠を補うべき役割を企図したもの、そして陝西省全体を集約する立場にあるとする碑林側の自負の表れと考えたい。実際私個人にとって幻の資料と思われていた北朝後期の造像碑が、ここから幾点かみついている。

右に言及したところにもわかるように、本書の一つの特色は各碑刻を拓本の形で示すことである。その形式について簡単に説明しておくとうである。まず各分類ごとに、全体にわたる概説がつく。すなわち「碑刻概述」「墓誌概述」といった形で、碑林におけるそれぞれに関係する事柄や特徴が論じられるが、執筆を担当するのは中堅の館員で、従来知られていない情報や傾向などを盛り込んだなかなかの力作である。この上で各碑刻が制作年代順（古い順）に掲上されるが、それに先立って各資料ごとの説明が用意され、その上で資料の拓本（図版）にと進む。

拓本にかんする各説明には、形状や大きさ、文字数や出土地、出土年や館収蔵年、さらには既存の関係史書・資料との関係などが要領よくまとめられ、これはこれで貴重な情報となっている。個々の拓本資料そのものは、原則として1頁目に全体図が出され、その後に各部分を拡大した図がくる。碑刻資料の場合、全体を一枚だけで出されると、細部は読み取れない（読み取りにくい）ことになる。そのため普通はルーペを片手に四苦八苦するはめになるわけだが、ここではその苦勞が免除される。しかも極力できのよい拓本を使う配慮がみえ、従来になく見やすくなっている。われわれは全体の形状を知り、各部分にも目をやり、自分の立場で文字を読み取ることができるのである。その上でなお間違えたとすれば、それこそ扱

う本人の責任となるのである。

歴史の研究において、これら生の資料とじかに向かい合うのはなかなか根気を要する。既存の編纂書籍などちがいが、文字や形状などどれ一つとっても同じでない。摩滅したり色あせたりして読み取れない場面にしょっちゅう遭遇する。点数が限られていればいいが、必ずしもそうとはならない。しかもそれらがどれだけ有効な材料（史料）になるか、判別はむずかしい。しかし反面そこには無限の可能性も秘められる。どこまでも根気と歴史を見る眼が試されるしんどさを覚悟しても、そこから知られる世界の面白さや魅力は何物にも代えがたいのである。『全集』の中身はわれわれに新たな学問的刺激を与えるものである。

5 おわりに

以上、西安碑林の歴史と『全集』の特色について紹介してみたが、収蔵される膨大な碑刻の量とその長い歴史的背景からみて、わずかにその一端にふれたに過ぎない。その不足を補い、また碑や墓誌の一枚一枚にこめられた物語を浮き彫りにするためにも、今度は別の「西安碑林物語」を書くしかないとの思いに駆られている。それにしても、前出の足立喜六が、「此等天然と人為との損害の間によく古碑を保護し、その幾分を今日まで伝存し得たのは、一に碑林設立の功に帰せねばならぬ」と指摘したのは重要である。碑林の果たしたその役割の大きさから、今われわれは最も多くの恩恵を受ける立場にある。『全集』刊行を機に、改めてかれら先人の労苦に思いを致してみてもよいだろう。

『西安碑林全集』全200巻（高峽主編、広東経済出版社・海天出版社、1999年12月）

参考文献

- 趙力光「西安碑林歴史述略」（『西安碑林全集』総冊巻、所収）
- 陝西省博物館編『西安碑林書法芸術』（陝西人民美術出版社、1983年）
- 路遠著『西安碑林史』（西安出版社、1998年）
- 西川寧編『西安碑林』（講談社、1966年）
- 宮川寅雄・伏見冲敬編『西安碑林書道芸術』（講談社、1979年）
- 塚田康信著『西安碑林の研究』（同刊行会、1983年）
- 明治大学東洋史氣賀澤ゼミ編「『西安碑林全集』所収「唐代墓誌目録」」（『明大アジア史論集』7、2002年2月）